

春採りタマネギの栽培法に関する試験

川崎 重治・斉藤 久男
(佐賀県農業試験場)

KAWASAKI, S. and SAITO, H.

Studies on the Onion Culture method for Spring Cropping

タマネギ栽培を安定化させるためには、経営規模の拡大とともに労働生産性の向上を図らねばならない。また労力配分と出荷期間の延長を図るためには作型の分化が必要となる。とくに3～4月の春採り栽培は、流通面と土地利用上から注目され、省力安定技術の確立が急がれている。以上のことから春採り栽培について1970年以来試験中であるが、本試験は春採り栽培の早熟化と増収を狙い、苗の種類と栽培法との関係を検討した。

試験方法

1. 試験区

栽培法	苗の種類	品 種
トンネル, マルチ栽培	仔球 成苗	冬採り黄 (福永系) 早採り黄 (藤原系)
マルチ栽培	仔球 成苗	長交OA黄 (タキイ)
裸地栽培	仔球 成苗	

栽培法

トンネルマルチ栽培; 作うね後白ポリフィルムをマルチし、ビニールフィルム透明0.075mmでトンネルかけする。

マルチ栽培; 作うね後白ポリフィルムをマルチする。

裸地栽培; 対照

苗の種類

仔球; 3月2日は種, 5月15日仔球採取, 球重5～6g, 球径1.5～2.0cm, オニオンセット

成苗; 8月25日は種, 慣行育苗による成苗, 葉数5～6枚, 草たけ25cm, グリーンセット

2. 耕種概要 10月18日にうね幅1.5m, 4条植, 株間10cmに定植し, a当たり施肥量は三要素各1kgを緩効性肥料を用い, 全量元肥として施用した。ほか一般管理は, 慣行法に準じて行なった。

試験結果

1. マルチ栽培区の地温は裸地栽培区に比べて2℃高い。トンネルマルチ栽培区ではさらに3～4℃高く推移

し, とくに12～1月の低温期では7℃以上が保たれ, タマネギの生育に強く影響した。

2. タマネギの生育は発育初期から後期にいたるまで判然とした違いがみられ, 苗の種類をとわず, トンネルマルチ栽培区の生育が進み, 各部位の発育量が多い。次いでマルチ栽培区がまさり, 裸地栽培区は著しく劣った。収穫時に起きた抽台は実用上支障とはならないが, 生育の進んだ栽培区ほど多く, 裸地栽培区は極めて少ない。

3. 球の肥大は温度条件に恵まれたトンネルマルチ栽培区が断然早く, 冬採り黄や早採り黄ほど早い。裸地栽培区はおくれ, 品種間差が大幅に縮まった。最も早い収穫は3月20日でトンネルマルチ栽培区が早く, 裸地栽培区は約20日ほどおくれ4月10日前後となった。マルチ栽培区は前二者の間である。また, 苗の種類では裸地栽培区では仔球と成苗との違いは少ないが, 他の栽培区においては仔球と成苗との違いは少ないが, 他の栽培区においては仔球が早い傾向を示した。時期別の収穫株率をみるとトンネルマルチ栽培とマルチ栽培の両区は3月下旬から4月上旬に集中的に収穫され, とくに冬採り黄や早採り黄がこの傾向が強く, また仔球苗が多い。一方裸地栽培区は4月10日以降の収穫となり, 品種間における収穫期の差が少ない。総収量についても同様な傾向が現われた。

4. 3月中旬からの春採りにはマルチ栽培が有効であることは既往の試験結果と一致し, さらに早熟化促進に効果的なトンネルマルチ栽培が実用的であるが, この場合品種選定が重要であることを認めた。したがってこの栽培には冬採り黄や早採り黄の利用が妥当で, 品種本来の結球特性を存分に発揮できる。成苗は植傷みによる生育遅延が要因で肥大性が劣ったが, トンネルマルチ栽培では苗質の改善と植傷みを軽減できれば仔球苗と同様の成果が得られるであろう。本試験では仔球苗が熟期や収量面でまさったが仔球養成などに問題がある。